

世界の漁業の現状と資源状況について

1. 世界の漁業生産の動向

(1) 漁獲及び養殖の生産量

世界の人口は、1950 年には約 25 億人であったが、現在は 70 億人を超えており、さらに 2050 年には 95 億人を超えると予想されている (UN-DESA)。FAO (国際連合食糧農業機関) のフードバランスシートのデータによれば、水産物は人類に供給される動物性タンパク質 (1 人 1 日当たり 32 グラム) の約 16% を担っている (表 1)。以下に述べるとおり、海面漁獲量は近年横ばい傾向であり、需要の増大には養殖による生産量の増大が応えている状況にあるが、それでも、漁獲と養殖を合わせた総生産量の 5 割は海面漁業によることから、海面漁業の対象資源が水産物供給に果たす役割は依然として大きい。

表 1 1 人 1 日当たり動物性タンパク質供給量
(資料: FAO Food Balance Sheet) (単位: グラム)

	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年	2011年
動物性タンパク質	24.5	25.2	26.4	27.9	29.3	31.5	31.7
うち畜肉	10.7	11.3	11.8	12.6	13.1	14.2	14.2
卵	1.9	1.9	2.2	2.5	2.6	2.7	2.7
ミルク(バター除く)	7.2	7.0	7.0	7.2	7.6	8.1	8.2
水産物	3.7	3.9	4.2	4.4	4.7	5.2	5.2
その他	1.0	1.1	1.2	1.2	1.3	1.3	1.4

世界の魚介類 (海藻類を除く) の漁獲と養殖を合わせた総生産量は増加傾向を維持しており、2012 年には 158 百万トン を記録した (図 1)。このうち、養殖生産量は 2012 年において 67 百万トンであり、2002 年の 37 百万トンから平均的には年率 6% で増加している。漁獲による生産量 (海面+内水面) は、約 90 百万トン水準で横ばい傾向にあるが、このうち内水面での漁獲は、統計値の信頼性の問題はあるものの、2010 年以降 11 百万トンを超えており、2012 年は 2002 年より 39% 増加している。海域 (FAO による区分) 別では北西太平洋が最も多く、次いで中西部太平洋、南東太平洋、北東大西洋などが続いている。国別では中国が最も多く、インドネシア、米国、インド、ペルー、ロシア、日本などがそれに次いでいる。

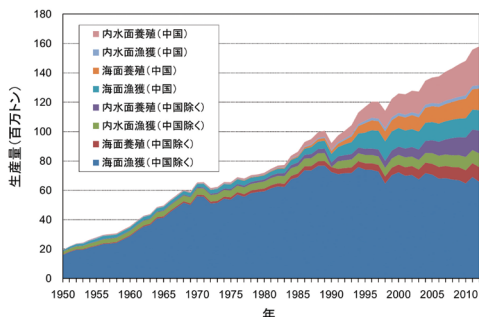


図 1. 世界の漁業生産量の推移 (FAO 統計資料 (海藻を除く))

海面漁獲量は 1950 年には約 17 百万トンであったのが、急速に増加し、ピークとなった 1996 年には 86 百万トン

を記録した。2012 年には 80 百万トンであり、近年は横ばい傾向である。なお、海面漁獲量のうち、南東太平洋のアンチョビーの漁獲は過去 10 年間 (2003 ~ 2012 年) において 4.2 ~ 10.7 百万トンの大きな変動を示し、2012 年は 4.7 百万トンであったものの、これ以外の漁獲量の変動幅は、同期間において 72.5 ~ 75.0 百万トンの範囲にとどまっていた。魚種別では依然として南東太平洋のアンチョビーが最も多く、スケトウダラ、カツオ、大西洋ニシン、マサバなどがそれに次いでいる。なお、主要な 23 魚種により海面漁獲量の約 40% が占められている。

(2) 我が国周辺水域の漁獲動向

我が国周辺を含む北西太平洋における漁獲量は、1980・1990 年代においては 17 ~ 24 百万トンの間で変動し、その後も変動しながら同水準を維持しており、2010 ~ 2012 年には約 21 百万トンであった。この漁獲のほとんどは、中国、日本、ロシア及び韓国による (図 2)。

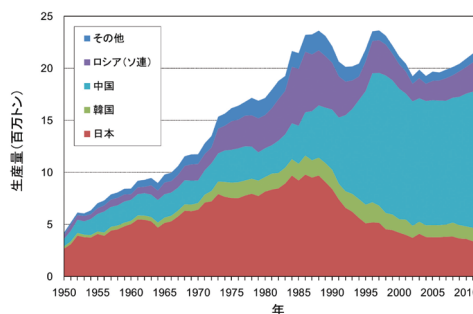


図 2. 北西太平洋における国別漁獲の動向 (FAO 統計資料 (海藻を除く))

北西太平洋における主要な魚種 (1950 ~ 2010 年の平均漁獲量上位 10 魚種) についてその漁獲量の推移を見ると、1980 年代から 1990 年代初期にかけてマイワシやスケトウダラが多獲され、1980 年代後半には各魚種で 5 百万トンを超える漁獲量が記録された。しかしながら、マイワシについては 1990 年代に入ると急激な減少を始め、近年は低水準の漁獲量となっており、また、スケトウダラについても 1990 年代に入ってまもなく 3 百万トンに減少し、2000 年代には

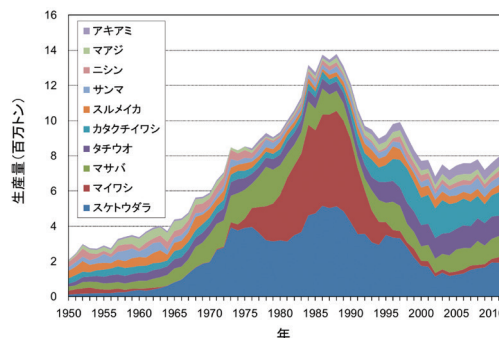


図 3. 北西太平洋の主要資源の漁獲動向 (FAO 統計資料)

1 百万トン台を推移している。一方、カタクチイワシの漁獲量は 80 年代までは 0.5 百万トン以下であったが、90 年代半ばに 1 百万トンを超え、現在もその水準を維持しているとされている（図 3）。

なお、かつお・まぐろ類、さけ・ます類をはじめとする各資源の漁獲動向については、それぞれの資源評価をご覧ください。

2. 漁業資源の状況

1974 年以降 2009 年までの FAO による評価において、過剰漁獲の状態にある資源は、1974 年の 10% から 1989 年の 26% まで増加し、1990 年以降もゆるやかながら増加傾向をたどり、2011 年では約 29% に達している。漁獲を拡大する余地のある資源は、1974 年には約 40% であったが、2011 年には 10% まで減少している（図 4）。

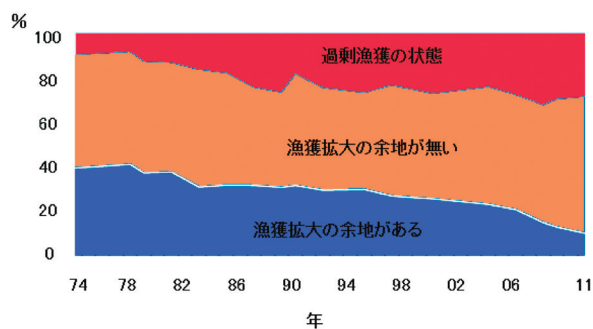


図 4. 1974 年から 2011 年までの世界の資源利用状況の傾向
 青：漁獲拡大の余地がある資源の割合
 オレンジ：漁獲拡大の余地が無い資源の割合
 赤：過剰漁獲の状態にある資源の割合
 (データ：FAO The State of World Fisheries and Aquaculture 2014)

世界の漁獲量の約 24% を占める上位 10 魚種については、漁獲を拡大する余地がないか、過剰漁獲の状態にある。漁獲量の多い南東太平洋のアンチョビー 2 系群、北太平洋のスケトウダラなどは、漁獲を拡大する余地がないとされている。北西太平洋では、タチウオが過剰漁獲の状態と評価されている。

まぐろ類の主要 7 種については、2011 年において、3 分の 1 の資源は過剰漁獲の状態であるとされている。

過剰漁獲の状態にある資源と漁獲を拡大する余地のない資源については、適切な資源管理措置により、資源の回復あるいは維持を図る必要がある。また、漁獲を拡大する余地のある資源についても、科学的根拠に基づく的確な資源評価が必要である。現在、各国の科学者が漁業者の協力を得ながら資源状態の分析に尽力し、世界の各水域での資源管理に重要な役割を果たしているが、評価に用いる指標や、生物学的な知見が乏しい資源も多い。我が国は、責任ある漁業国、消費国として、資源状況及び動向要因の把握に努めるとともに、各種の地域漁業管理機関において、従来にも増して積極的なリーダーシップを発揮し、科学的知見に基づく適切な資源管理措置の導入に貢献する必要がある。

執筆者

水産庁 増殖推進部 漁場資源課
 西田 宏

参考文献等

世界人口動態
 UN. Department of economic and social affairs
http://esa.un.org/unpd/wpp/unpp/panel_population.htm
 フードバランスシート
 FAO. Fisheries and Aquaculture Department statistics
<http://faostat.fao.org/site/368/default.aspx#ancor>
 FAO による各統計値
 FAO. Fisheries and Aquaculture Department
<http://www.fao.org/fishery/statistics/en>
 FAO による総説
 FAO. Fisheries and Aquaculture Department
 The State of World Fisheries and Aquaculture -2014
<http://www.fao.org/fishery/sofia/en>